

〔学会記録〕

東日本歯学会第13回学術大会

(平成7年度総会)

—一般講演抄録—

平成7年2月25日, 薬学部P-1講堂

1. 歯科保存修復学基礎実習における項目別窩洞形成評価

—第2報, 93年度と94年度との比較について—

佐藤 禎子, 畑 良明, 横内 厚雄
 豊岡 広起, 永井 康彦, 荆木 裕司
 松田 浩一

(歯科保存学第二)

演者らは, 93年度4年生より保存修復学基礎実習に窩洞の自己評価法を導入し, 前期実習, 後期実習における自己評価の差異, 指導教員との差異について調査した。学生自身に理想とする目標にどの程度到達したかを確認させ, さらにフィードバックにより技術訓練させることが可能であることを明らかにした。窩洞そのものに対する概念は前期実習終了時には形成されていることが示唆されたが, 学生は, 指導教員による判定よりもあまい判定を下す傾向があることも判明した。そこで, 94年度の前期実習から全ての実習課題に対して項目別窩洞評価表を配布, 課題が終了する毎に自主的に自己評価を行わせた。その評価に対して指導教員は, 敢えてアドバイス, 講評を加えなかった。

今回は, 93年度と同様に上顎右側第1大臼歯のII級インレー窩洞形成課題について窩洞に対する評価をさせ, 両者の相違を比較検討したところ, 以下の結論を得た。

1. 窩洞そのものに対する概念は, 前年度と同様に前期実習終了時に既に獲得されていると推察された。
 2. 指導教員による判断よりも緩く判定を下す傾向は, 本年度も認められたが, 前年度学生の評価よりも厳しく評価を下す傾向があった。
 3. 前期実習での指導教員の評価において, 前年度の学生よりも本年度の学生の方が低い評価を下した。
 4. 後期実習では各項目において, その技術は上達したと推察されたが, 隣接面部の形成において上達したとは認められなかった。
 5. 全ての実習課題に対して項目別窩洞自己評価表を配布, 学生に対して自主的に自己評価を行わせたが, その効果は認められなかった。
- 今後は, これらを踏まえて隣接面部の形成に対して形成方法も含めて指導方法も変えていく必要があると思われる。